

歴史的音源（れきおん）の収集と提供

国立国会図書館関西館電子図書館課 村上 浩介

国立国会図書館では、平成 21（2009）年度から平成 24（2012）年度にかけて SP レコードのデジタル音源約 4.9 万点を収集し、現在、「歴史的音源（れきおん）」のサービス名称で提供している。このサービスについて、概要を紹介する。

1 歴史的音源の収集経緯

国立国会図書館は日本における唯一の法定納本図書館であり、国内で発行されたすべての出版物は、国立国会図書館に納入することが義務づけられている。この納本制度が始まったのは昭和 23（1948）年 5 月 25 日であるが、レコードがその対象となったのは翌昭和 24（1949）年からである。平成 26（2014）年 3 月末時点、SP レコード約 1 万 6 千枚、LP レコード約 17 万 5 千枚、EP レコード約 10 万枚を所蔵している¹。

しかしながら、SP レコードは納本制度の対象となる以前から出版されており、当館所蔵分はその一部に留まっている。一方、SP レコードの原盤（金属原盤等）は、戦火による破壊や喪失、レコード会社自体の廃絶等によって多くが失われてしまったほか、現存する原盤でも劣化が見られるようになっている。放送局、民間愛好家、全国の資料館等で所蔵されている SP レコードも、半世紀を超える経年変化による劣化やひび割れ・欠けなどによって、再生が困難になっているものが増加してきていると推定されている²。

このような状況を鑑み、国立国会図書館ではこれらの「歴史的音源」を我が国の貴重な文化財として収集することとし、これまでに、歴史的音盤アーカイブ推進協議会（以下、「HiRAC」という。）によりデジタル化された音源約 4.9 万点を収集した。

2 HiRAC による音源のデジタル化

HiRAC は平成 19（2007）年、歴史的・文化的資産である初期のレコード（SP 盤）及び原盤の劣化、散逸等による音源の喪失を防ぐため、音源をデジタルアーカイブし、広く国民に公開・伝承する目的で、国内の音楽関連 6 団体により設立された団体である。

HiRAC は、SP レコードの音源リストの作成、権利処理、メタデータ（タイトル、作詞・作曲者、アーティスト等の情報）の整備及びデータベースの作成を行うとともに、音源のデジタル化を行った³。デジタル化の開始は平成 21（2009）年からであるが、デジタル化に先立ち、SP 原盤等の実態調査、デジタル化に係る技術検証、権利処理・利活用等の運用方法の検討を行っている⁴。実態調査としては、各レコード会社による SP 盤・金属原盤・マスター原盤、及びそれらに付随する楽曲情報資料・台帳・データ等の保管状況、保管実数の調査が行われた。またデジタル化に係る技術検証としては、通常プレーヤーでは再生不可能な金属原盤の再生実証実験、逆針・逆回転プレーヤーの製作と再生検証、再生針の太さ検証、メタデータ項目の検討等が行われた。運用方法については、国立国会図書館からの提供を前提として、インターネット配信、公立図書館等での配信までの利活用を見据えて検討が行われた。

このような準備を経て、デジタル化が行われた。デジタル化の作業は各レコード会社が担当し、使用された機器、手法（サンプリングレート、ビット深度、ノイズリダクションの有無等）が若干異なっている。デジタル化元の媒体は、各社に保管されていた SP レコード、原盤、テープ等のほか、金沢蓄音機館より無償提供いただいた SP レコード等、様々である。メタデータについても各レコード会社が作成したが、あらかじめ記述要素、記述形式を定める等の標準化を行っている。

3 歴史的音源の提供の現況

国立国会図書館では、これらの音源が収録された光ディスクを順次受け入れ、図書館資料として保存するとともに、ネットワーク配信に適した品質に圧縮した音源ファイルをデジタルアーカイブシステムに登録し、平成 23 (2011) 年から「国立国会図書館デジタルコレクション」の 1 コレクションとして提供している。約 4.9 万音源の大半は、国立国会図書館及び配信提供参加館（国立国会図書館に申請のあった全国の公立図書館、研究機関等）⁵の館内での利用（ストリーミングでの視聴）となっているが、著作権及び著作隣接権の保護期間満了が確認された約 1,100 点については、インターネットでも利用が可能である。

平成 25 (2013) 年 3 月には「歴史的音源（れきおん）」として独自のインターフェースを開発し⁶、邦楽、流行歌・歌謡曲、落語・漫才・浪曲・講談等のジャンルによる音源ブラウジング、テーマに沿った「音源紹介」等、より利用しやすい機能、コンテンツを搭載している。

提供を開始してから 3 年以上経過し、ユニークなコンテンツとしての評価を得ている一方で、主たる利用者の年齢層が高く PC 端末での視聴操作に手間取るケースがある、図書館職員にとって一般的になじみの薄いコンテンツであり案内や利用促進が難しい、メタデータが不十分であるなど、徐々に課題も見つかっている。今後も引き続き、このような課題に取り組みつつ、配信提供参加館、ひいては利用者の拡大に努めていく予定である。

(参考文献)

- 1 国立国会図書館. “調べ案内: 録音資料”. 国立国会図書館リサーチナビ. 2014-06-28.
http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-602009.php, (参照 2014-08-14).
- 2 藤本草. SP 盤のデジタル化: 利用と保存の両立をめざして. 国立国会図書館月報, (606), 2011.9, p. 4-6.
http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192241_po_geppo1109.pdf?contentNo=1, (参照 2014-08-14).
- 3 特集: 音の記録を後世に: SP 盤のデジタルアーカイブ事業にせまる. The Record, (642), 2013-05, p. 4-7.
<http://www.riaj.or.jp/issue/record/2013/201305.pdf>, (参照 2014-08-14).
- 4 音源のデジタルアーカイブに関する実証的調査研究調査報告書. 歴史的音盤アーカイブ推進協議会, 2008.3. 86p.
- 5 平成 26 (2014) 年 8 月 13 日現在、151 館が参加している。
http://dl.ndl.go.jp/ja/rekion_librarylist.html, (参照 2014-08-14).
- 6 <http://rekion.dl.ndl.go.jp/>, (参照 2014-08-14).